見方

Mooicco9

2017.2.2

見える世界

人と話しているとあなたは見えても自分は見えない。一体自分とは何だろう。自分の体を使っているのに、自分が自分を理解していないとあなたは見えない。あなたが分からなければ自分は分からないのだろうか。僕は鏡に自分の姿が映らない。そして影もない。だから孤独だ。学校へ行っても一人で勉強している。自分で自分が見れないので自分がわからない。僕はなぜ自分が見れないんだろう、考えれば考えるほど他の人とは違って嫌だ。辛い、苦しい、悲しい、それを飛び越えて死んでしまいたい。だから死のうと思って、踏切で死のうと思った。音がなり、バーを越えて僕は線路で空を眺めて「これで全てが終わる、これでいい」電車がきた、覚悟した。僕の上を電車が通った。その瞬間は人々の重みを感じた、人々の毎日の重みだ。そして体がふわっとして目が覚めた。僕は生きていた。僕は何のために生きているか分からない。僕は僕が見たいんだ。僕は僕でありたいんだ。これでも神様は僕に生きろというのか？何のために。周りが嫌な目で僕を見る中、学校の同級生のあなたが僕に話しかけてきた、そして始めて人に打ち明けた。「僕自分の姿が見れないし、自分が何者なのか分からないんだ」「わかろうとしないから、わからないんじゃないか？」あなたは言った。「生きろ、死んだら灰になってあの世に行くだけだ、今を楽しめよ」僕は人生は楽しくないものだと思っていた。何をやっても楽しいと思った事はない。ただ生きているだけだ、感動もしない、無機質な毎日だ。「じゃあ、俺と遊ぼうぜ」あなたは言った。「きっと、いいものがわからないんだよ、自分がわからないから、自分はラーメン好きか？」「あ、あー、ラーメン好きだぜ」「うまいラーメン食べようぜ」二人はあなたが思う美味しいラーメンを食べに行った。そして自分は感動した。「こんなうまいラーメンあるのか？」これは本心だ。「あー誰にも言ってない俺の秘密のお店だ」「しかしうまいな、こんなうまいラーメンがあるなんて知らなかった」「世の中結構広くて、人に合う合わないはあるんだ、自分の道に乗ると同じような人が集まるし、は、はっ生きて見るもんだろ？」自分は泣いた。そしてあなたが打ち明けた。「俺が死ねば、きっとお前、自分が見れるよ」「えっ、何でだよ」「あー俺、お前だもん」「ほんとなのか？」「絶対だ、お前が鏡に映らない、お前の影の部分だ、だからお前が考えている事も、やってきた事もわかる、そして俺が行ってきた事も、何となく伝わっているはずだ、俺も辛かった、何となく、踏切にきたけど、やっぱりお前がいた、本当はお前が死ぬんじゃなくて俺が死ぬんだ、それが正常という事なんだ、俺は俺の道、影になりたい」「お互い辛いんだな、俺、孤独だから、俺と友達になって一緒に生きよう、それでいいじゃん、これで俺が見えるようになった」「何で全然似てないんだろう？」「似てないから、影なんだよ」

楽しいか

あなたは言った、「楽しいか？」自分は考えた、お前がいればいい。あなたは思った。本当か？だが、自分はだんだんと楽しみを覚えていた。自分が映らない原因がわかったからだ。ただあなたは納得できなかった。本当の幸せとはありきたりな普通の幸せだからだ、そして覚悟を持って話した。「お前、自分鏡に映りたい？」「いいや、俺はもういいや、自分は分からないけど、お前が自分だからな」「本当の自分の姿が見れるんだぞ」「興味はあるよもちろん、でも、お前が死ぬほうが、俺、よっほど辛いからな」「そしてあなたは包丁でいきなり首を切った」「おい！何やってんだ」血が吹き出し、あたりは血まみれになった。そしてその姿は消えた。血の後もなかった。ふと寒気と恐怖が入り混じり、僕は鏡をみた。僕の顔には包丁で切り刻まれたような傷があった。これが僕の顔。初めて見る顔がショックすぎて、僕は言葉を失った。そしてあなたがいない事、顔に大きな傷がある事、僕はあなたがいる方が幸せだった。これならあなたがいた方が良かった。僕は泣いた。そして思った自分は自分を見ない方がいいのではないかと。そして包丁を持って死のうと思った。そしたら影のあなたが浮かび上がって包丁を取った。そして影が喋る。「あなただ。「よ、俺がお前を守ってやるから、安心して生きろよ」「僕は死ねないのか？と一瞬戸惑ったが」あなたと喋れるのなら、生きていて楽しそうだと思うので、生きる決意を新たにした。

あなた

自分はあなたと話したかった。人間として。だから僕が影の世界に行けないだろうかと考えた。そうすればきっとあなたの影になれるのではないか。だから、あなたにそっちの世界に連れてってと願った。そしたら今度は自分が影の世界の影になれた。あなたの影にだ。影の世界は自分を追求する場所だった。あなたを守るというよりはあなたを追ってそこから考えるただの影だった。自分は影のまま生きていくのは辛いと思った。きっとあなたも死んでしまったので、きっと辛いんだろうと思った。だからあなたに聞いた「影って辛いだろ？」「俺も影をやってみて、守るところ守って、あとは見てるだけだ、そんな生き方はないと思う」「本当はお前のために影になったけど、あんまり意味はない。」「じゃーお互い表で生きるべきだ」「確か、お前の家の神棚の鏡が割れただろ、あれが原因って聞いた事がある」「よし、それを見つけて直そう」二人は表の世界で鏡を直した。鏡が心の中に入っていった。そして自分とあなたはお互いに人間として生きる事が出来た。自分も鏡に傷がなく映った。影もある。あなたも影の世界を辞めあなたとして生きている。